『秘密の日記』

「兵士ウィトゲンシュタイン」の戦闘体験の記録

星川啓慈

はじめに――テクストについて

このたび、春秋社から長大な解説つきで、ウィトゲンシュタインの『秘密の日記』（『日記』）を刊行していただいた。おそらく、研究者をふくめた読者のほとんどが、彼の哲学や人間性を理解するうえで第一級の資料であるこの『日記』を読んだことがないだろう。これは研究者の間で「MS一〇一～MS一〇三」と呼ばれるテクストのことであり、暗号体で書かれている。完全な形では高額の電子媒体でしか見ることができない。

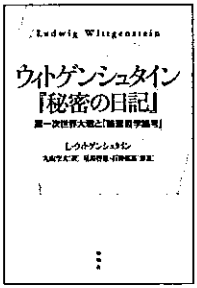
W・バウムが一九九一年にこのテクストを解読・翻刻した（ただしテクストとしては問題が多い）。しかしながら、このドイツ語版は間もなく絶版となった。その後、二〇一四年になって彼自身の著作に再録されたが、再版されたテクストは以前のものよりも良くなったわけではない。

さらに、ウィトゲンシュタインのテクストは、独語の原文とその英訳とが併記されて出版されることが多いのだが、この『日記』の英訳は未だに出版されていない（スペイン語訳等はある）。その理由の一端は、訳者の丸山氏が書いている。

> ウィトゲンシュタインのテクストが形式的にも内容的にも様々な解釈を惹起するものであったこと、この「秘密の日記」に書かれた内容が悪感情の無制限の発露や性生活の記録を含むものであったことなどを考えるとき、遺稿管理者が彼を〝守ろう〟としたのも首肯できる。

第二の点についてストレートに述べると、ウィトゲンシュタインは「性欲」「自慰」について淡々と述べているのである。

そして、驚くべきことに、この同じ『日記』の中に、度重なる激烈な戦闘を前にして、「神」や「霊」に全身全霊をあげて祈っている一人の「宗教的人間」としてのウィトゲンシ



丸山空大［翻訳］
星川啓慈・石神郁馬［解説］
本体2800円＋税

ユタインの生きざまが克明に記されているのである。この『日記』は彼の正真正銘の「自画像」なのだ。

この『秘密の日記』は、広く知られている『草稿一九一四－一九一六』（『草稿』）と同一のノートに書かれている。すなわち、このノートの右半分が後者で、左半分が前者なのだ。一冊のノートの哲学的な部分（右側）は早くから（一九六〇年）公刊されたが、私的な部分は長らく「秘密」にされてきたというわけだ。

「動物」になったウィトゲンシュタイン

筆者が解説したい文章が『日記』には山ほどある。ここでは一九一六年に書かれたものから一か所だけ紹介する。この年の七月半ば頃までに、オーストリア軍はロシア軍の追撃によって、カルパチア山脈のブコヴィナあたりまで押し戻されていた。ウィトゲンシュタインが所属するオーストリア軍にとって、戦況も天候も過酷であった。夏とはいえ、冷たい雨と霧の中での生活は、彼にとって「苦痛に満ちた生」であった。そうした中、彼は次のように認めている。

> 昨日、砲撃を受けた。弱気になった！　僕は死への不安を感じた！　僕は今、なんとこんな願いを抱いている。生きたい！　そして、ひとたび生に執着するなら、それを放棄することは容易ではない。それこそまさに「罪」であり、非理性的な生であり、生についての間違った理解である。僕はときおり動物になる。そのときには、僕は食べること、飲むこと、眠ることの他は何も考えることができなくなる。恐ろしいことだ！　つまり、僕は動物のように、内的な救済の可能性を持たずに、苦しむ。このときには、僕は自分の情欲や嫌悪感にゆだねられている。そうなれば、真の生についてなど考えるべくもない。（強調原著者、『日記』一九一六年七月二九日）

ウィトゲンシュタインがこうした状態――自己を見失い、本能的な動物になり、ただ生きようとしているだけで、宗教・倫理・道徳・救済などと無関係な状態――に陥ったのは、おそらく、生涯でこの時が初めてであろう。だとすれば、この「動物」的な状態において初めてというか、それ以前にも増してというか、人間にとって神・宗教・倫理・道徳・救済といったものがどれほど重要なものかを、彼は認識／再認識したに違いない。

『秘密の日記』をザッハリッヒに（事実に即して）読むことの必要性

今回の企画を世に出すに際して、『秘密の日記』を読むには軍事的な細かな知識が必要であることを痛感した。たとえば、ウィトゲンシュタイン自身が「兵員はわずかの例外を除いて、志願兵である僕を憎んでいる」（一九一六年四月二七日）と書いている。この文章は伝記的著作にしばしば引用されるのだが、かつてこの引用を読んだとき、筆者には「志願兵だから憎まれる」という論理は理解できなかった――志願兵であれば尊敬されるのではないか、と。「志願兵」と訳される「Freiwillige」は、「一年志願兵」（Einjährige）と同じ意味である。「一年志願兵」は、一定以上の社会的地位を有する家庭の出身者でないとなれない。この階級章を腕につけるということは、「親の金でこの地位を買った」ことを公言しているようなものである。それゆえ、一年志願兵たちが同世代の兵士の羨望だけではなく、嫉妬や侮蔑の対象であったことは想像に難くない。このことを知って初めて、右のウィトゲンシュタインの書付や、周りから冷たく当たられて苦しんでいる彼のことも理解できるのである。

また、「探照灯」という言葉も『秘密の日記』には頻出する。

> 今夜！　――――！　われわれは速射砲と機関銃を撃つことになるだろう。……僕はまた、事態は危険になってゆくだろうと読む。もし、僕が探照灯で照らさなければならなくなれば、確実に僕は終わりだ。しかし、それは何でもない。というのも、為すべきことはただ一つだからだ！　……神は僕とともにいる！（強調原著者、『日記』一九一四年一〇月一二日）

どうしてウィトゲンシュタインは「確実に僕は終わり」と書いたのだろうか。それは、彼が就いていた「探照灯係」は敵の集中砲火の格好の標的になるからである。探照灯係は「自らを犠牲にすることで自軍全体に尽くす係」（解説者の石神氏）といっても過言ではない。また、探照灯に使用されている高熱の炭素棒の交換は辛くて危険な作業となる。触れれば服が一瞬で燃えるほど、金属製の筒や各部品が灼熱している中に、上半身を突っ込まなくてはならない。探照灯係というのは大変な任務だったのである。

ウィトゲンシュタインが乗艦していた「ゴプラナ」という小型砲艦がある。多くの本にその写真が掲載されているから、ご存じの読者も多いだろう。読み合わせの際に、「朝、サンドミエシに向かって航行した。途上、（ゴプラナ号の）推進輪が壊れた」という文章に出くわした。そして、「推進輪」（Schaufelrad）には「蒸気船の外車」という意味もあるとの説明もあった。筆者は「スクリューの間違いだろう、あまりスピードの出ない艦は役に立たないのではないか」と疑問を呈した。しかし、写真を詳しく検討するうちに、ゴプラナ号の船体の横側に「箱」のようなものがあるからこの内側に「推進輪」が取り付けられているのだろう、という結論になった。また、一見では、写真に「砲」は見えない。だが、眼を凝らしてみると、「速射砲」らしき砲が前方に（後方に

も?）装備されていることも確認した。

さらに、石神氏が「小型砲艦」について調べると、いろいろなことが分かってきた。川は底が浅いため、航行する艦の重量が過大だと川底に接触し、損傷や座礁の危険が高くなる。ゆえに、小型砲艦は軽量な船体にならざるをえず、これに伴い、武装・装甲も基本的には弱体であった。とくに、装甲は薄くされることが多く、野砲（砲兵隊が扱う最も軽量な大砲）程度の砲弾であっても、複数発の被弾に耐えられるようには造られていなかったのである。

ウィトゲンシュタインはある時の乗艦について次のように書いている。

> たった今、われわれの小艦〔ゴブラナ号〕が直ちにヴィスワ川を下ってゆくという命令を受けたと聞く。――。われわれはもう航行している。僕は霊だ、それゆえに僕は自由だ。われわれはロピザにとどまっている。榴弾がわれわれの上を飛んでゆき、ピューピュー音を立てる。
>
> （強調原著者、『日記』一四年一〇月一三日）

読者は「僕は霊だ、それゆえに僕は自由だ」というウィトゲンシュタインの言葉に驚くかもしれない。大型戦艦とは違って「われわれの小艦」が小型であるうえに装甲が貧弱であることを心に浮かべれば、この言葉の受け取り方も違ってくるであろう。

おわりに

要領を得ない『秘密の日記』についての解説になってしまったが、「世界初の完全版の翻訳」を読むことによって、読者はこれまで知らなかったウィトゲンシュタインの姿を知ることになる。また、『論理哲学論考』（『論考』）の「六・四」以降は、彼の戦闘体験を知らずには深く理解できないことを痛感するだろう。そこには、文字通り「生死の間」をさまよった彼が、腹の底から絞り出した言葉が散りばめられているからだ。彼の戦闘体験を知ることは、スピノザやショーペンハウアーたちからの思想的な影響を知ることと同じように、いや、それ以上に、重要なのである。

さらに、長大な解説では、(1) 宗教的文章が突如書き始められる「一九一六年六月一一日」は編集者の書き換えであること（写真付き）、(2)『論考』の基本的枠組みが確立したのは一九一六年の七月六日・七日であること、(3)『論考』の「序文」は哲学的諸問題に対する「撃滅戦」のことを述べていることなども論じた。『秘密の日記』の翻訳出版は、読者諸氏のこれまでの「ウィトゲンシュタイン像」を大きく揺さぶるに違いない。

ほしかわ・けいじ▼'56年生まれ。大正大学教授。